

大和の伝説

許可を得て、仲川明著、奈良新聞出版センター刊
「子供のための大和の伝説」より抜粋

(地名は原文どおりの表記です)

他に掲載ご希望の伝説・昔話などあれば、材料をご提供ください。

百貝岳 (ひゃくかいだけ) と餅飯殿 (もちいどの) 町

吉野山の南方八キロ、百貝岳の中腹、黒滝村鳥住に、大峰山を中興した理源大師の開かれた鳳閣寺 (ほうかくじ) という真言宗のお寺があります。

役行者 (えんのぎょうじゃ) が大峰山上ヶ岳 (さんじょうがだけ) を開かれてから、二百年ほどたった時、山中の滝に大蛇がすんで人に危害を加えますので、大峰へ登山する人も少なくなり、霊場も荒れはててしまいました。

そこで、理源大師は勅命を受け、奈良に住んでいた武勇の先達で、箱屋勘兵衛という人を供につれて、百貝岳のふもとに着き、ホラが淵で水ゴリをとり、百貝岳に登って、大きなホラ貝を吹いて祈とうをしますと、その音は百のホラ貝が一時に鳴ったような音をたてましたので、大蛇はホラを出て山へ登ってきました。

そこで、大師は法力でこれをしぼりつけ、勘兵衛は大きなオノをふるって二つにきりました。これから大峰登山の道も再開されることになりました。それでこの山を百貝岳というようになり、大ホラ貝と蛇の骨が宝物になって、いまもこのお寺に残っています。

* * *

奈良に餅飯殿 (もちいどの) 町という、おもしろい名の町があります。いまは奈良のにぎやかな商店街になっていますが、勘兵衛さんはそこに住んでいた人でした。

奈良から鳳閣寺の理源大師のもとへ参る時は、いつも大師の好物の餅 (もち) や飯 (いい) などを持って行きましたので、大師は勘兵衛さんのことをたわむれて餅飯殿、餅飯殿とよばれました。

それから、勘兵衛さんの住んでいる町の名も餅飯殿 (もちいどの) 町となったのだといわれます。

不審ヶ辻子 (ふしんがづし) (奈良市)

奈良市の御所馬場と鶴福院町との間を通る東西のせまい横町を不審ヶ辻子 (ふしんがづし) といい、俗にフリンガンツシと呼んでいます。この面白い町名ができたいわれにこんな話があります。

むかし、御所馬場に松浦という長者が住んでいました。ある夜、ひとりの賊がこの家へ忍びこみました。長者はこの賊を押えて、現在奈良ホテルのある鬼隠山（きおんざん）から谷底へ投げこんで殺してしまいました。

その後、この賊の霊が鬼となって、毎夜、元興寺（がんごうじ）の鐘楼に現われて、人を悩ました。

当時、元興寺には、後に道場法師となった偉い坊さんが、まだ小僧で修行していましたが、この小僧さんが進んで鬼を退治しようと申し出ました。そして鐘楼で待ち受けていますと、果たして鬼が現われてきました。そこで小僧さんと鬼とがはげしい格闘をし、まだ勝負がつかないうちに夜が明けてきました。夜が明けてはと、鬼はあわてて鬼隠山の方へ逃げ出しました。小僧さんも続いてその跡を追いましたが、今の不審ヶ辻子の辺までいった時、たちまち鬼の姿が見失われました。それから、フシンガヅシという地名が出たといひます。

この元興寺の鐘楼にあった鐘は、現に奈良市高畑町の新薬師寺の鐘楼にかかっている、当時、格闘の時の鬼の爪のあとというものが、その片側にたくさん残っています。

千両橋と千石橋 （奈良市と吉野郡）

奈良の聖武天皇御陵前の、佐保川にかけた橋を法蓮橋といひますが、別名を千両橋ともいひます。

元来、この御陵の東側は多門町で、ここは奈良奉行所に勤めた与力たちの住宅地ばかりでした。

奈良奉行所は幕府の出先の役所で、奈良女子大の所にあつたので、与力はここに勤めて、多門町の居宅へは法蓮橋を渡って帰るのでした。何にせよ、飛ぶ鳥も落とすお役所の人たちで、その収入のお金も目ざましく、日に千両の金がこの橋を渡って居宅へ運ばれたといひて、千両橋と名づけられました。

* * *

吉野川をはさんで、南に下市町、北に大淀町があり、その間をつなぐ橋を千石橋といひます。

むかし、楠正行が、最後に吉野の宮に参上する時、一族郎党はわずか百四十余騎にすぎませんでした。正行は知恵者でしたから、敵の隠密の眼をあざむくために、付近の民家から、古わらじを千足集めさせて、橋の上にならべ、将士がみなそのところで、わらじをはきかえたようによそおひました。

それまでは、この橋を桧橋といひていましたが、それからは千足橋というようになりしました。

その後、戦国時代のころ、織田信長の命によって、筒井伊賀守が吉野郡の土地を取りにきました。

吉野方の大将堀小次郎は、家老広橋矢五郎・矢三郎の兄弟を率いて防ぎましたが、小次郎は今の鳥尾の「小次郎松」のところで討死し、広橋兄弟は筒井氏に降参し、吉野八郷は、ついに千石の米をお納めすることを約定し、豊臣氏の時までこれが続きました。

この米を渡すことによって、センゾク橋は、千石渡台の橋といわれ、ついにセンゴク橋というようになりました。

登り坂のくさ神さん (奈良市)

奈良から桜井に通じる上街道にそって、奈良市横井町の登り坂という所に、青井明神という小さな神社があります。

今は奈良から天理へ大きな道がその東方に新しくできているので、この上街道はさびれていますが、むかしはおもな街道で、人々はみなこの道を歩いて奈良から桜井、初瀬の方へ行ったものです。この青井明神は、むかしはかさ神とも、ほうそう神ともいったが、一般には、くさ神さんで通っていました。そして、くさができると治してくださる神さんと信じられていたのです。今でいうと皮膚病といいます。むかしはくさ、またはかさといったので、くさ神または、かさ神といいました。この神さんをまつてある地名をかさ神とって、奈良県に四十五ヵ所ほどあります。たいていは笠の形をした石などを、むかしまつっていた所です。

むかし、小野小町という女の歌よみが、京都の都の宮中の歌の会に出ていましたが、ある人の讒言によって宮中を追われ、全国のあちこちを歩きまわっていました。そのうちに皮膚病にかかって困っていました。ところが、ある夜、夢に翁があらわれ、「奈良から一里南へいったところに、ホウソウ神をまつる神社がある。そこへ参り一心に拝むがよい」と告げました。

小町はそこへ参って、二十一日間、水をかぶって祈願しますと、満願の日に、くさはすっかり治りました。小町は、

はるさめは今ひと時に晴れゆきて

ここにぬぎおくおのが身のかさ

という歌を残して、伊勢の方へ行ってしまったということです。

かさと笠をもじった歌ですが、今もこの神社はくさの神さまとして、絵馬などをあげてお参りする人があります。

帯解の子安地藏 (奈良市)

奈良から国鉄に乗って南へ行くと、次が京終(きょうばて)駅、その次を帯解(おびとけ)駅といいます。

帯とけとは変な名だなあ、と他国の人はふしぎに思われますが、そこは奈良市東今市で帯解寺という有名な寺があるので、その名をとったのです。

帯解寺の本尊は子安地蔵とよばれる立派な地蔵さんで、毎年七月二十三、四日には地蔵祭りでにぎわいます。

むかし、文徳天皇の皇后さまを、染殿皇后と申しました。皇后がおなかが大きくなされたのに、月が満ちてもお子さまがお生まれにならないので、宮中ではたいへん心配しておられました。

ところが、ある夜、皇后さまのお夢に

「奈良から南へ一里ほど行ったところにお寺がある。その寺の地蔵さんのからだに帯を巻きつけ、それを皇后さまのおからだに結んで、さらに、それを解いたならば、ご安産になる」

ということを見られました。

翌日、皇后さまがそのことを文徳天皇にお話になりました。

それはほんとうかも知れぬといって、臣下を使わされますと、はたして地蔵さまがおられました。

夢のとおりにして帯をたわって帰って、それを染殿皇后に献上いたしました。

皇后がそれをお腹帯になされ、それからまた解かれると、間もなく皇子が安らかにお生まれになりました。天皇も皇后も大へん喜ばれ、子安地蔵という名をたまわったのが、今の帯解寺の本尊であります。

この皇子は九歳で即位された清和天皇で、染殿皇后は藤原良房の娘明子で、このころは、藤原氏がだんだん盛んになってきた時代です。

櫟 (いちい) の木と天狗 (天理市)

むかし、天理市櫟本 (いちのもと) の西にいちいの大木がありました。この木の上に天狗が住んでいて、いっちゃんの実を投げて人を苦しめました。また近所のにわとりや、果物をとって暴れ、はては毎年ひとりずつ娘を人身御供に出せとまでいいました。

覚弘坊というえらい坊さんが中国から帰ってきて、この天狗退治をもくろみました。ある日、覚弘坊が、

「もしも天狗さん、シナからいいものをみやげに持って帰ったよ」

と木の下から呼び、衣の中から目がねを取り出して、

「これをかけると、大和国中 (やまとくんなか) すっかり透して見えるんだ」

と誘い出しました。そして目がねと櫟の木と交換する約束をしました。

坊さんはのこぎりで木を切りました。木は西を向いて倒れ、天狗は米谷山 (まいたにやま) の方へ去ってしまいました。

櫟の根元を櫟本村 (いちのもとむら)、櫟の枝の指した方向を櫟枝村 (いちえだむら)、横のところを横田村、枝を積んだところを千束村 (せんぞくむら) と名づけたといわれています。

* *

こういう伝説を地名伝説といいます。こんな村の名の出来たもとは、もっと違ったものかもしれませんが、むかしの人は、そのわけがわかりませんので、それに疑問を持ち、その解決談として、こんな話ができただけです。

箸中長者と荒坂長者 (桜井市と五条市)

桜井市箸中 (はしなか) にある大きな御陵のような前方後円墳の古墳は「やまとととひももそ姫」のお墓だといわれていますが、一般には「箸の墓」とよばれており、次のような伝説があります。

むかし、箸中に箸中長者とよばれる長者がいました。この長者のお家には、大きくも小さくもならない「金のなる木」がありました。

毎日毎日、お金がふえる一方で、長者はあきあきしてききましたので、一度貧乏をしてみたいと思いました。

毎日、三度の食事の時の箸を捨てると天罰で貧乏になれるということを思いついたので、そのようにしてみました。

その捨てた箸の山が今の「箸の墓」だということです。そのために、箸中長者はどうも貧乏になってしまったことは、いうまでもありません。

* *

これと同じような話が、五条市の今井町にもあります。

近内から五条の方へ行く道の荒坂峠に、むかし、荒坂長者という長者がいました。この長者もお金がありすぎるので、どうかしてこのお金をなくするようにと思っ、毎日の三度のご飯のたびに箸を代えて食べることにし、一度使った箸は同じ場所に捨てさせました。

それで、ついにお箸の塚ができたそうです。それと共に、さすがの長者の家運も傾いてきて、没落してしまったことは、箸中長者と同じことです。

* *

現在は割箸が機械でたくさん製造されることになりましたので、割箸などは一飯ごとに捨てることもあります。むかしは箸を大事にし、一度ごとに捨てておれば、長者でも貧乏になると考えていたのです。

長谷寺の未来鐘 (桜井市)

桜井市初瀬町の長谷寺山門をぬけて、長い回廊をのぼりつめたところで、頭の上をおおぐと、大きな鐘がかかっています。外から見ると、ここは鐘楼になっていて、尾上の鐘という鐘がぶらさがっています。この鐘を未来鐘ともいわれて有名なのですが、それにはこんな伝説が伝わっています。

むかし、奈良の北にあたる山城国（京都府）の木津の里に、ひとりの貧しい人がありました。名は野慈（やじ）とよび、家は貧しいが信心深く、長谷寺の観音さんに月まいりをしていました。

ある時、宿坊の慈願という坊さんに、この寺の鐘楼の小さいことを話して、

「わたしの願いが成就しますと、鐘を一つ奉納したいと思います」

といいました。聞いていた人々は、

「なあんだ、未来のことか。今、奉納するのかと思うと、お前の願いが成就してからのことか」

と行って笑いました。

それから、この男はみんなから、未来男とよばれていました。

ところが、その後、観音さまの御利益によって、この男は近江の国の国司代という役にまで出世し、栗田助貞と改名し、鐘を奉納して供養を営んだということです。

それで、世の人は、この鐘を未来鐘とよび、未来男と笑われていた人に感心したということです。

この鐘は火事で焼けて、今かかっているのは、その後に寄進されたものですが、やはりこの鐘を、今も未来鐘といい伝えております。

追付の森 （御所市）

御所市玉出町、下市街道に沿うた東側、人家のかたわらにある森を追付（おいつき）の森といいます。

むかし、役の行者が十七歳の時、初めて葛城山へ修行のため登山されますと、どこからか、十五、六歳の少女が現われて行者にたわむれました。行者は手に持っている独鈷杵（どっこしよ）をもって、その少女を打ちますと、その少女は大いに怒って悪臭を吹きかけました。そして西南の方へ逃げていきましたので、行者はそれを追いかけて、近づくと、少女は大蛇と化して行者を呑もうとしました。行者も通力自在の身であったので、大蛇に負けることなく、わざと左右へ身をかかわして戦っていますと、御所の鴨の神がこれをご覧になって走ってこられ、行者と力を合わせて大蛇を追い払われました。それで、ここを追付の森といい、森の中に追付大明神という神さまをまつてあります。

この因縁によって、御所の鴨の宮の氏子らがこの祠を造営し、鴨の宮のお旅所となっています。

* * *

怪しい少女の化身である大蛇は、追付の森からさらに西南の方へ逃げて行き、市部（いちべ）村の西の大きな穴の中へすくみこみました。行者はこれを野口大明神とあがめ、その穴を小石で埋められました。この因縁によって、毎年旧五月五日に御所・さらぎの童子らが寄りあって、小石をもって互いに打ち合いする行事となっています。それで市部村を、のちに蛇穴村と改め、「さらぎ」村といいました。それが今の蛇穴町（さらぎちょう）の由来です。

蛇穴と書いて、さらぎと読むことは大変むつかしくて、むかしからいろいろ学者の説がありますが、まだはっきりとしません。

汁掛祭の由来 (御所市)

葛城山の下、御所市の南郊に蛇穴(さらぎ)というふしぎな名の村があります。

この村の野口神社では、毎年五月五日のお祭りのあとで、「汁掛け」「蛇綱曳き」という奇妙な行事を行なっています。

この日は、朝から座本の家で村中の人が集まって、三斗三升三合(およそ70リットル)の豆味噌をすり、汁をこしらえて、村人も飲み、当日の参詣人や道を行き交う人々にぶっかけます。これは邪気をはらい、もろもろの病を除くということで、わざわざ近在から参詣する人が相当あります。

その汁掛けが終わるとワラで作った蛇綱を、善男善女が村中ひき回って後、野口神社に納め、社前の大老樹に巻きつけて行事が終わるのです。

その起源について、野口家にこんな伝説が伝わっています。

その家の祖先である神武天皇の御子の彦八井耳命(ひこやいみのみこと)の後裔、茨田(まんだ)の長者が、河内の国からこの蛇穴(さらぎ)の地に来て住んでいました。

その長者にひとり娘がありました。そのころ茅原郷(ちはらごう)から葛城山に、雨の日も風の日も、かかさず修行に通う役の行者を、この娘がお慕い申しましたが、行者は修行一途でふりむきもされませんでした。ついに娘は女の一念から蛇身に化けてしまいました。時あたかも旧五月五日の田植え時で、村人が野良への弁当を持って通りかかると、大きな蛇が火をふいていました。びっくりして、持っていた味噌汁を、蛇にぶっかけて逃げてかえりました。それから、大ぜい誘い合わせてきて見ると、今まで恐ろしく火をふいていた蛇が、かたわらの井戸の中に、おとなしく入っていきました。村人はこれ幸いと、巨きな石をもって井戸をおおいました。

その後、その娘の供養にと、野口神社の祭典に、汁掛祭りや蛇綱曳きの行事をし、その霊を慰めるのだということです。

モコン鳥居 (五条市)

五条市小和(おわ)の御霊(ごりょう)神社は、光仁天皇の皇后井上(いがみ)内親王をおまつりしてあります。光仁天皇は奈良朝七代の天皇の最後の天皇ですが、その皇后さまの井上内親王は廃されて、その上五条市の近くへ流されられたと伝えられています。そんなお気の毒な方だから、さぞその靈魂はお怒りになっているだろうというので、その靈魂を慰めるためのお宮をまつられることになりました。御霊神社というのは各地にあります。井上内親王に限らず、こういうお気の毒な方をまつる神さまです。

さて、この小和の御霊神社は、はじめ旧南宇智村霊安寺におまつりしてありましたのを、いまから五百年ほど前に、いまの五条市（旧宇智郡）内五十三ヶ村に宮分けをしてまつることになりました。ところが、この時、お宮にあった神宝を方々の村へ分けて持っていきましたが、お霊様はこの小和に移られることを希望されたといって、小和の人はお霊様の御神体をおかついで帰ってきました。すると霊安寺の人は、御神体を奪われては大変だといって、これを取り返そうと追っかけて、野原のところで、御神体の手をつかまえました。そこへ大島の人がお霊様を負うて吉野川を渡らしてくれました。

それから逃げて帰って、ほっと一息していると、追ってくる人もありませんでしたので、そこへ鳥居を建てました。

もう来んというので、それをモコン鳥居と名づけました。

そして、間もなくお宮を造っておまつりしたのが、いまの小和の御霊神社だといいます。

しんぐりまくり （山辺郡）

山辺郡山添村に助命（ぜんみょう）という村があります。むかし、善明寺というお寺があったので、ぜんみょうといったのだろうが、後に助命という字を書くことになりました。

この村のお宮さんは、八王子神社といって、百メートルばかりもある高い石段があり、下からお社を見上げると、森がこんもりと茂っていて、なかなか神々しいお宮さんです。

この石段には、時おり、夕方になると、「しんぐりまくり」というあやしい者がきて、しんぐりをころばすことがあるとあって、おそれられています。

「しんぐり」とは、竹であんで魚を入れるもので、「まくる」というのは、高いところから、物をころばして落とすことです。

そのしんぐりまくりの中には、いたずら小僧が入れられているのだということです。こんなしんぐりまくりに入れられて、高い石段からころばされると、どんなになってしまうか、わかりきったことです。それで、この地方では、子供がいたずらをする

「そら、また、しんぐりまくりがやってくるぞ」とあって、おどかしますから、子供はおとなしくなるということです。

* * *

また、この近くに小原（おはら）という所があり、今は宇陀郡室生村になっていますが、むかしの伊勢街道に面して、右側に崖があり、ここを「しんぐりまくり」と呼んでいます。ここで、むかし子供がしんぐりに入れられて、谷底へまくられたのだと、言い伝えているのです。

こういうことが、事実あったか、どうかわかりませんが、これは、むかしの大人が子供をおどかすために作りあげた伝説だと思います。

奈良の近くでは、「がんご」が出るというし、川のある所では「がたろ」が出るというのと同じような話です。

しんぐりに入れて、高い所からまくるといのは、さすがに山の中の人が考えた話だと思います。助命では、このしんぐりまくりは、夕方になるとやって来るといのはらしいが、夕方暗くなって、外で遊んでいるとあぶないから、早くうちへ帰るように、お父さんやお母さんが、そういったのだと思います。とくに、そんな高い石段や、崖の所で夕方遊んでいると、どんなけがをするか、誰にさらわれるか、危険なことです。それで、お父さんやお母さんは、それが心配で、こんな伝説を子供さんに聞かせたのだと思います。

狐井と板仏の祭 (北葛城郡)

北葛城郡香芝町に狐井(きつ井)という村があります。この村は全般に水が悪かったが、むかし、お宮のほとりに一匹の狐が住んでいて、いつのまにか、この狐の穴から清水がわき出してきました。

今もお宮の隅に、この「狐の井戸」があつて、清水がわいており、近所の人はこの水を使っています。

狐井という村の名も、この井戸から起こった名です。

この狐井の赤土(しゃくど)家の庭に、美しい竹が茂っていますが、これはその先祖の方が立てかけておかれた竹の杖が、一夜にして葉が出て根がのびて、竹になったといひます。また狐井のお宮さんは、元はこの赤土家の屋敷の守り神であつたといひ、この一夜竹の下に大きな石があつて、この石の上につまつていたといわれ、今でもこの石に腰をかけたり、よその人がこの竹を切ると腹痛を起こすそうです。

* *

香芝町良福寺の方から流れてきて、狐井の東側を流れている小川を津川といひますが、むかし、あるお婆さんがこの川で洗濯をしていると、池のいで板に描かれた仏さまが流れてきました。たいそう有難い仏さまであつたので、狐井の「ドヤマ」の下につまつたのが七月九日でした。それで、この日は板仏の祭りといひ、必ず少しでも雨が降るといわれていひます。

この板仏は、今はこの村の福応寺につまつられています。

座頭淵と筏乗りの神 (吉野郡)

吉野川の流れの中には、いろいろの難所があります。大淀町下淵と佐名伝(さなで)の間に、ザタブチ、あるいはザツタブチという淵があります。

ザタ、またはザツタといひのは座頭のこころしいのです。それで、このザタブチ、またはザツタブチといひのは、座頭さんが、誤つて足をすべらして、吉野川の淵へ落ちて死んだ所だそうです。

こういう吉野川の難所は、筏乗りの人にも難儀なところでした。

下淵の上流、増口の椿井（つばい）の森の下は、奔流が岩を打つところで、筏乗りの難所といわれています。

年々、死者や負傷者を出す事故がおきますので、明和四年に筏連中が相談して、椿井の森、増口の水分（みくまり）神社に高さ六十一段の石段を献上しました。それからは一人も水難がありませんでしたので、筏乗りの神さまとして、あがめられております。

それでその祭礼の時は、水上安全の神様として必ず、川魚、鮎などをお供えされるそうです。

近年は、ここの氏子に熱心な方があって、歌や俳句の献詠を求めて、お祭りの日に、これを神様に献上されております。

篠原殿 （吉野郡）

足利時代のことだといいますが、篠原という武士が吉野郡大塔村の篠原へやってきました。

村人は、おとなしい彼を篠原殿と呼んで尊敬していましたが、やがて傍若無人な振舞い、人を人とも思わぬ悪いことをするようになりましたので、たまりかねた村人は、川相撲を催して彼を招待し、策略によって一挙に殺そうと考えました。そこで村人は篠原殿の見物席として木と竹とを組んだ栈敷をつくり、止木をはずすと栈敷全体が一瞬にしてこわれるように仕組みました。

さて、川相撲の当日、篠原殿は栈敷の中で酒を飲んでいましたが、酔いつぶれるのを待って、止木をはずしましたので、篠原殿は川の中へはまりこみ、川は血で真っ赤になりました。

絶体絶命になった篠原殿は、虫の息ながら、平素のことを詫びたのち、

「村から川瀬峠に登る途中に、大きな岩の中に穴があります。その中に金の銚子と金の盃とを隠して、外から岩のふたをしてあります。そのふたにきざんだ字を読んだらふたが開くようになっていきますから、この二品はそれを読み解いた人にあげます」といって、息をひきとりました。

それ以来、村人はこの品を得ようと努力していますが、まだ見あたらないということです。

この村は、それまでは川瀬といっていました。篠原殿以来、篠原といわれるようになりました。それでもいまだに元の川瀬といっている人もあります。

泣き坂 （吉野郡）

吉野郡野迫川今井の近くに泣き坂という坂があります。

むかし、弘法大師が、高野山に水が少ないので、よい水を得たいと思って、天川村坪内の弁財天社へお通いになりました。

それは、この坪の内の弁天さんは水晶の玉を持っていらっしゃるの、それがあると、よい水を出すことができますので、何とかしてその水晶の玉を手に入れたと思われたからでした。

しかし、弁天様はこの玉を大事にしておられて、手離されることはありませんでした。そこでお大師さんは苦心してこの玉をぬすんで逃げ出されました。弁天さんは怒って追いかけられました。お大師さんはついに追いつめられてしまったので、ついに秘法を使って霧を吹いてそこへ隠れました。弁天さんはそれでそこからむこうへ行くことが出来なくなり、泣く泣く引返されたといひます。

それで、そこを泣き坂というのだそうです。

なお、その引き返された所に立てられたという柞原（ほそはら）の弁天様の社殿は、いまでも高野山の方を向いています。

あの高野山の弘法大師め、わしの大事な玉をぬすみやがって、残念だ！と、弁天さんは今も弘法大師の方を向いていられるのだと言ひ伝えています。

腰拔田 （吉野郡）

吉野郡十津川村五百瀬（いもせ）の中央にある芋瀬田（いもぜだ）は、五百瀬の荘司の宅があった跡と伝えられています。この田を一名腰拔田（こしぬけだ）ともいわれています。元弘元年十月、護良親王が熊野へ落ちて行かれる時、従者数人を従え、芋瀬の荘司が守っている関所をすぎようとされましたところ、荘司はこれをことわり、

「親王の錦のみ旗か、近臣の首を渡して下さい」

といひましたので、やむなく、錦の旗を与えて、あぶない所をのがれました。

一行からおくれてこの関所にさしかかった村上吉光は、荘司の家に護永親王の旗がかかげられているのを見て、大いに怒り、関所の役人を前の田の中へ投げとばして、旗を取り返しました。

役人どもは腰の骨が抜けて、立つことができませんでした。

それで、その田を腰拔田と名づけました。

神納川原（かんのかわら）の三反三畝ほどの田ですが、明治二十二年の水害で、埋まったといひます。

* * *

平維盛の子孫だといひ小松氏の話をきくと、五百瀬の荘司は小松の養い子で過去帳にも名前がのっており、墓地も一段と下った所にありますが、小松の先祖には入れてないといひことです。